
ピーマンおじさん

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピーマンおじさん

【コード】

N1393T

【作者名】

つわの空

【あらすじ】

ピーマンの中から出てきたのは、小さなおじさんでした。

ピーマンからこんにちは。

「おっかしいピーマンだなあ」

私はスーパーで買ってきたピーマンを見ながら呟いた。それから笑った。

大学生になって一人暮らしを始めてから、独り言が多くなってしまった気がする。まあ、家に一人しかいないんだから、電話でもしてない限り、何を言っても独り言になるんだけど。さすがに2カ月も経つと一人暮らしには慣れたけど、やっぱりちよつと寂しいこともある。そういう時はいつも以上に独り言が増える気がする。

「これでピーマンの肉詰めを作ったら、食べ応えがあるぞー！」

東京の物価は高いんじゃないかってお母さんは心配してたけど、そんなことない。こんなに大きなピーマンが、あんなに安かったんだから。

実家にいたころから料理の手伝いはしていたから、自炊には自信があった。今日の晩御飯はピーマンの肉詰めだ。ミンチ肉も安かったから。

私はピーマンに包丁を当てて、ぐつと力を入れようとした。次の

瞬間

「待ちなさい！！」

どこからともなく声がした。私はびっくりしてあたりを見渡す。ただど一人暮らしの私の家に、誰かがいるはずはない。空耳だと思いい、もう一度ピーマンを切ろうとした。

「ゆっくり！！いいかい、ゆっくり切るんだよ！！」

やっぱり声が聞こえる、気がする。泥棒かと不安になったが、泥棒にしては言ってることがおかしい。せめて、私がピーマンを切ってる間に逃げてほしい。私はピーマンを、ゆっくりと切り始めた。

「そう、そう。良いぞ……。ゆっくりだ、ゆっくり。オーライ、オーライ」

もしかして、お隣さんが大きな声で独り言を言ってるのかも知らない。うん、きっとそうだ。何の独り言なのかは、分からないけれど。

とん。

包丁がまな板に当たる音がした。ピーマンが真っ二つに割れる。私は真っ二つに割れたピーマンを見て、目を見開いたまま固まってしまった。

ピーマンの中から、小さなおじさんが出てきた。

「やあ」

やあ、じゃない。私は眼をこすった。しかし、どこからどう見てもちっさいおじさんである。しかも、真っ裸の。とりあえず大事なところは、自分の手で隠してくれているけど。

「な、なに!？」

「誰?の間違いだろう、はっはっは」

はっはっはじゃない。なんなんだこれ。いや、なんなんだこの人。とりあえず、服をくれないかい」

そう言われたものの、このおじさんサイズの服なんて持つてるはずがない。私はティッシュを引つ張りだすと、おじさんに一枚渡した。おじさんはそれを器用に折って、バスタオルのように身体に巻きつけた。

「風呂上がりのようだね、はっはっは」

私にとってはそんなことはどうでもよかった。おじさんの言葉は無視して、ピーマンからちっさいおじさんが出てきたという不思議現象について、納得のいく説明を考える。：駄目だ、やっぱり変だ。そんな話聞いたことない。これはきつと、何かの悪い夢に違いない。ああ、一体何を考えてたら、こんな変な夢を見るの。

私はちらりと、おじさんを見る。まな板の上の小さな人間は、バ―コード頭で、おながが出ていて、ちよっとねちねちした喋り方で

…やっぱりどう見てもおじさんだった。まな板の上の小さな…人間？
「おじさん、人間のの？」

思わず変なことを聞いてしまう。もしかしたらこう見えて、ピーマンの精だとか言うかもしれない。

「人間以外の何に見えるかね」

…人間にしか見えない。だけど、こんな小さな、しかもピーマンから出てくる人間なんて見たことも聞いたこともない。桃太郎じゃあるまいし。

「君、名前は？」

おじさんに言われて、思わず律儀に「竹内久美です」と答えてしまった。

「そうか、よろしくな。久美さん」

よろしくと言われて驚愕する。このおじさんは、ここを出ていく気はないらしい。だけど、このおじさんをどうすればいいのか。テイツシュを巻いただけのこの状態で、外に放り出すのもかわいそうだ。ああ、長野のお母さんに相談したい。だけどピーマンからちっさいおじさんが出てきたなんて話、信じてくれるだろうか。

「おじさんには、名前がないんだ。だから、おじさんと呼んでくれ」
言われなくてもさつきから、おじさんと呼んでしまっている。私は弱々しく、「はあ」と返事をした。それを聞いておじさんは満足そうに笑う。反対に、私はため息をついた。

「君、一人暮らし？」

おじさんにまた質問されて、律儀に「はい」と答える。先ほどから、おじさんに先手を取られてしまっている。

「そうかそうか。よかったね、おじさんがいたら、もう寂しくないぞー！！」

確かにさつき、ちょっと寂しいとか思ったけれど、ちっさいおじさんと住みたいとは思っていない。桃太郎みたいに、赤ちゃんならまだともかく…。

私は桃太郎の話を思い出して、顔が真っ青になった。確か桃太郎

は成長して、鬼退治に行つたはずだ。成長して。つまり、大きくなつて。

「おじさん、大きくなるの!?!」

「む、失敬な。おじさんはこう見えてまだまだ元気なんだぞ!」

おじさんの返事の意味が分からなくて困惑する。どういう意味かと考えて、理解した途端、今度は顔は真っ赤になった。

私が心配しているのは、おじさんの大事なところのことじゃない。

「そうじゃなくて、身長が伸びたりとかするんですか!?!」

気付けば敬語になつている。おじさんは、はっはっはと笑つと

「そんなまさか!?!だつておじさんはもう、おじさんだぞ!?!」

と当たり前のように返してきた。そりゃ、おじさんの身長がそんなに伸びるなんて思わない。普通の、おじさんなら。

どうすればいいか分からなくなって、私はキツチンにへたりこんだ。『保健所』という現実的な単語と、『ピーマンからおじさん』

と言う非現実な単語が、頭の中で交錯する。そんな私を、おじさんは心配そうな顔で見ている。

「大丈夫かい、久美さん」

大丈夫じゃないし、おじさんの所為だ。

「元気を出したまえ」

おじさんはさわやかに笑つた。その顔は、ちょっとかわいかった。

しばらく悩んでから、私は決意して立ち上がった。まな板の上のおじさんの方を見て、言う。

「ごはん食べますか」

「ああ、おなかぺこぺこだよ」

「あとで、服も作りますから」

「おお、ありがとう」

そう、しばらくの間だけ。しばらくの間だけ一緒に暮らそう。もしかしたら、そのうちここから出ていってくれるかもしれないし。」
「ところで、今日の晩御飯は何かね？」

おじさんの質問に、また頭が真っ白になった。

ピーマンの肉詰めは、しばらく食べられそうにない。

おじさんとの生活

ピーマン太郎と名づけようとしたけれど、おじさんはやっぱりおじさんがいいと言った。

私も、（自分で考えておきながら）ピーマン太郎はどうかと思うので、おじさんと呼ぶことにした。

ピーマンから出てきたおじさんと一緒に晩御飯を食べた。おじさんが出てきたピーマンは、結局捨ててしまった。もつたいないけど、食べる気になれない。ピーマンは諦めて、ミンチ肉でハンバーグを作った。おじさんに小さく取り分けてあげると、つまようじを使って器用に食べ始めた。

「ピーマン、やっぱりもつたいなかったかなあ……」

敬語じゃなくていいよ！とおじさんに言われたので、ため口ではやいた。

「いいじゃないか。別に」

おじさんはくちやくちやとハンバーグを咀嚼しながら、続ける。

「おじさん、ピーマン好きじゃないし」

だったらなんでピーマンから出てきたんだ。

ご飯を食べた後、私は適当な布を引っ張り出して、おじさんのために簡単な服を作った。自分で言うのもなんだけど、私は割と手先が器用だ。おかげで、服は簡単にできあがった。一番簡単そうなのTシャツとズボンと下着を作っただけなんだけど。おじさんはその服を着ると、満足そうに

「ありがとう、大切に着るよ」

と言った。おじさんはなんて言うか、変なところで紳士だった。

黄色い布でTシャツを作ったせいかな、おじさんは24時間テレビの出演者みたいに見えた。

おじさんとの、奇妙な共同生活が始まった。

おじさんがピーマンから出てきた次の日は土曜日だった。私は、休日はいつもバイトに行っている。もちろん、今日もバイトだった。そこで迷った。

おじさんをどうしよう。

家に置いていこうと思っていたが、家探してもされたらたまらない。おじさんに見られたくないものが、この家には結構ある。下着とか、下着とか、下着とか。

私はさんざん迷って、結局おじさんも一緒に連れていくことにした。鞆の中にすっぽりと入ったおじさんは「なるべく揺らさないでね。どこかにぶついたりしないでね。潰さないでね」

と不安そうに言ってきた。昨日のハンバーグのミンチ肉が、一瞬私の脳裏をよぎる。

私は鞆をやりわりと抱える格好で（あんまり強く抱きしめたら、中のおじさんが潰れそうだから）、外を歩く羽目になった。

おじさんには悪いけれど、バイト中は更衣室のロッカーの中にいてもらおう。そう考えながら更衣室に向かって歩いてみると、背後から登のぼが声をかけてきた。登は私より3つ年上で、バイト先の先輩だ。

「よ、おはよう」

「あ…おはよう」

登は、振り返った私を見て、不思議そうな顔をする。

「なんだ？そんな必死に鞆抱えて。大事なもんでも入ってるのか？」
まさか、ちっさいおじさんが入ってるとは言えない。

「うんまあ…ちょっと」

曖昧な返事をする、登は私の顔を覗きこんで来た。

「だいじょぶか？またなんか抱え込んでない？」

「…平気平気」

一瞬、おじさんのことを相談しようかと思っただけどやめた。いくら登でも、流石にこれには引くかもしれない。

「なんかあったらいつでも言えよ。相談に乗るから」

「ありがとう、登」

「公私混同厳禁。店では岡田って呼べよ？竹内」

「うん」

登と別れた後、鞆の中からおじさんが話しかけてきた。

「もしかして…久美さんの彼氏さんかい？」

私は照れ笑いを隠せなかった。

「うん」

「そうかあ…」

おじさんは嬉しそうに、呟いた。

大学入学と同時に始めたバイトは、私にとっては人生初のバイトだった。全国チェーンのこのファミレスは、お客として入ったことは何回もあった。だから仕事も覚えやすいんじゃないかと思っていた。でもやっぱり、働いてみると全然違う。とにかく忙しい。右も左もわからなくてうるたえている新人の私に、丁寧に分かりやすく教えてくれたのが登だった。

当時の私は田舎から出てきたばかりで、友達を作る勇氣もあまりなかった。けど登は、そんな私のことをいつも気にかけてくれた。彼は本当に優しくかった。

気付けば好きになってた。しかも、両想いだった。

「青春だなあ…」

その話を聞いたおじさんは嬉しそうに、うんうんと頷いた。

「で、今日のバイトはどうだった？」

「…あんまりうまく働けなかった」

今日は失敗をして、店長からこっぴどく怒られてしまった。それをおじさんに話すと、

「そうかあ。でもね、きつと店長は久美ちゃんに期待してるんだよ。諦めてたら、怒ったり注意したりしないもの。きつと、久美ちゃんは伸びる子だって思われてるんだよ」

「そうかなあ」

「そうさ」

おじさんは笑った。

日曜日のバイトが終わると、私はおもちゃ屋さんに行った。目的はもちろん、小さな人形売り場。そこで売っている人形用の食器や家具、衣類は、おじさんにぴったりのサイズだった。私は食器と、男の子用の衣類を何着か買った。おじさんはドレスも着てみたいと言ったが、それは私が却下した。

ご飯は私のものを少しあげるだけでいい。お風呂は、湯船の代わりにお椀を使った。目玉のおやじみたいだと、2人で笑った。

私がおじさんに何かする度に、おじさんはいつも「ありがとう」と言っただけで笑った。

おじさんは私が落ち込んでいると、笑って励ましてくれた。

おじさんとの生活は、意外と心地よかった。

おじさんは、私が思ってた以上にいい人だった。

おじさんとお魚

おじさんと一緒に暮らし始めてから2カ月がたったころには、私とおじさんはすっかり仲良しになっていた。バイトに行く時は、おじさんにお留守番してもらうこともあった。おじさんはきつと家探ししない、下着を見たりはしないという信頼関係が築けていた。

おじさんは私が留守にしている間、出来る範囲で家を掃除してくれたり、自分の服を自分で洗ったりしていた。ちなみに服を洗うときは、焼き肉のたれの蓋をたらい代わりにして、器用に手洗いしていた。

「今日は登君とデートかい？」

おじさんにそう訊かれて、私はびっくりした。

「分かるの？」

「わかるさ。デートの日は、嬉しそうなオーラが出てるからね。はっはっは」

おじさんは自慢げに笑った。

「今日はどこに行くんだい？」

「水族館だよ」

「水族館!?!」

おじさんは眼を輝かせた。

「いいねえ。おじさん、魚が大好きなんだ。刺身は最高だよ。塩焼きもいいが」

水族館は、魚を食べる場所じゃないんだけど。

いいなあいいなあと言っているおじさんを見て、私は観念した。

「おじさんも、一緒に来る？」

「え、いいのかい!?!」

「鞆の中から、ちよっと顔を出すくらいしかできないけど。それで

もいなら」

おじさんは大喜びで、お洒落しなくっちゃとはしゃいだ。鞆の中にいてもらうわけだから、人前には出ないのに。

結局おじさんは、私が作った黄色いＴシャツを着て、水族館へ行った。

「俺さ、就職決まったんだ」

魚を見ながら、登は照れたような顔をした。

「ほんとに！おめでとう」

「ありがとう。あそこならさ、俺の夢も叶えられそうなんだ」

「エンジニアとして、アメリカで活躍するっていうあれ？」

「そうそう。何年かかるか、分からないけど」

登はそのあと何かを言おうとして、やめた。そして、水槽の中を覗きながら、

「あれは鯛だな。鯛の刺身は最高だよな。塩焼きも美味いけど」
それを聞いて、私は思わず笑った。

「おじさんと同じこと言ってる」

「え、誰？おじさんって」

私は一瞬、心臓が止まるかと思った。しまった、うっかり口を滑らせてしまった。

「あの、えと、…親戚のおじさんよ」

「ふうん」

登は特に怪しまず、「親戚のおじさんと趣味が合いそうだ」と言
って笑った。

「おじさん、登君と趣味が合いそうだよ！」

家に帰った途端、おじさんは叫んだ。とてもとても、嬉しそうな表情で。

「いいなあ。彼はいいよ。あんなにキラキラした若者、なかなかいないよ！！彼はいい」

「そ、そう?」

「ああ!鯛の塩焼きをほめる若者は、良い若者だと決まっている!」

「それ、おじさんの持論じゃないのか。」

「ああ。おじさんも、青春したかったなあ」

その言葉を聞いて、私は思わず突っ込んだ。

「え?おじさんは青春しなかったの?」

そりゃそうだよ、とおじさんは笑った。

「おじさんは、生まれたときからおじさんだったんだもの」

おじさんの生態型は、私には一生分からない気がする。

おじさんの誕生日

月日は流れて、私は2年生になった。登は就職してから仕事が忙しいらしく、会える機会はめつきりと減った。

その日の晩御飯は、鯛の刺身と塩焼きと、それからハンバーグだった。たんぱく質だらけだなあ、と作りながら思った。

それらの料理を目の前にして、おじさんは眼を輝かせた。

「え、え、どうしたんだい？えらく豪勢じゃないか！」

「あー、おじさん覚えてないんだ」

私はカレンダーを見せた。

「今日は、おじさんの誕生日なんだよ。…誕生日って言えるのかどうか分かんないけど」

そう。おじさんがピーマンから出てきたあの日から、今日でちょうど1年だった。

おじさんはぽかんと口を開けて、それからはっはっはと笑った。

「よく覚えていたね、久美ちゃん」

「当たり前でしょ。あんな濃い一日、忘れたくても忘れられないって」

それに、おじさんの誕生日は私しか知らないから、せめて私だけでもちゃんと祝ってあげたかったんだ。

食後のデザートに、おじさんと二人でケーキを食べた。と言っても、スーパーで売ってた安物だけど。それでもおじさんは、おいしいおいしいと言ってくれた。

さすがに一年もたつと、おじさんの食べ物の趣味は大体把握していた。大好物は鯛と、ハンバーグ、それから甘いもの。嫌いな食べ物はピーマンとパプリカ。本当に、なんでおじさんはピーマンから出てきたんだろうか。

「久美ちゃんはきつと、いいお嫁さんになるよ」

ケーキを食べ終わると、おじさんはつまようじで歯をしーしーしながら言った。

「ごはんもおいしいし、優しいし」

「そう？えへへ」

「久美ちゃんがお嫁に行く時は、おじさん泣いちゃうかもしれないなあ」

おじさんが遠くの方を見ながら呟いた。少しだけ、悲しそうな顔をして。私はその顔を見て、何故か急に寂しくなった。

「結婚式にはさ、もちろんおじさんも呼ぶよ」

「ええ？本当かい」

「うん。きつと、おじさんの好きな鯛料理もあるよ」

「そうかあ。そうだよなあ。めでたい、だもんなあ」

おじさんは嬉しそうに、頷いた。

この時おじさんは、どんな気持ちでこの話をしたんだろうか。

私の将来は？

大学生になってから、急に時間の流れが速くなった気がする。3年生になると、周りの皆は就活だ、進学だと騒ぎだした。

母から電話がかかって来たのは、就職活動が本格的になってきた秋ごろだった。

『久美、あんた進路はどうすんの』

「そっち帰って、家を継ごうと思う」

部屋の隅で、自分の服を手洗いしていたおじさんがこちらを振り返る。

『農家の娘は嫌だと言ってたくせに』

「んー。だけどさ、野菜って思った以上に面白いなーって。ピーマンとか」

『ピーマン？』

それを聞いていたおじさんが、声を押し殺してくくくと笑った。

『まあ、帰ってきてくれるならそれはそれでいいけどね。美香がさ

あ、大阪の大学を受けるって言ってるの』

「美香が？」

美香は私の妹で、今年受験生だった。長野を出て一人暮らしがしたいと昔から言っていたけど、そうか、大阪に行くのか。

『美香まで出て行っっちゃったらさあ。来年からお母さん、お父さんと二人暮らしになっっちゃうのよ。もー、今から気が重いわよー！』

「あははは」

私が笑うと、母はため息をついてから、ところどころでさあ、と続けた。

『あんた、彼氏さんとの関係はどうなのよ』

「え？順調だけど…」

登とはちよくちよく会っていて、会う機会こそ減ったものの仲が悪くなつたわけではなかった。

『結婚とかは考えてないの？』

「結婚!？」

思ってもみなかった母の言葉に、私は思わず大きな声をだした。おじさんがまた、こちらを振り返る。

『もしかして、もう同棲してるとか』

「…ないない！」

まさか、登とじゃなくて、ちっさいおじさんと同棲してるとは言えなかった。

電話を切った私に、おじさんは楽しそうに話しかけてきた。

「久美ちゃん、ピーマンを作るのかい」

「そうだねー。それもちよっと考えてるんだけど」

私は結構本気だった。おじさんはにんやりしてから

「もしかしたら、久美ちゃんの育てたピーマンから、違うおじさんが出てくるかもしれないぞ！はっはっは」

と、豪快に笑った。

「そんなまさか。ピーマンから出てくる人間なんて、おじさん一人で十分だって」

私は小さな声で、はははと笑った。

衝撃の事実

大学4年生になった春、私はバイト先の植村先輩とランチに出かけた。植村先輩は2年付き合っていた彼氏さんと、今年の夏に結婚することが決まっている。結婚式の準備が面倒くさいのだと、ランチセットのカルボナーラを食べながら先輩はぼやいた。

「そろそろあの人もお別れしなきゃいけないしねー」
「え、なんですか？あの人って」

私はどきりとした。まさか先輩、浮気をしていたのだろうか。しかし、先輩から返ってきた答えは、私をさらに驚かせた。

「パプリカから出てきた、おっさん！」

私は危うく、食べかけのパスタを吹きそうになった。先輩は「いつ追いつくかな」とぼそぼそ言っている。

「な、なんですか？パプリカから出たおっさんって」
「恐る恐る尋ねると、先輩の方が目を丸くした。」

「え、なに！？あんた見たことないの？ピーマンとかパプリカとかの中からさ、たまに出てくるでしょ、小さいおっさん！」

私は20年以上生きていくけど、小さいおっさんが出てきたのは後にも先にもあの一回しかない。それに、今までそういう話を聞いたことすらなかった。だけど先輩の話しっぷりからすると、小さなおじさんの存在はほとんどの人が知っていて、しかも結構な確率でおじさん入りのピーマンやらパプリカやらに遭遇するらしい。

私が黙っていると、先輩はますます驚いた顔をした。

「知らなかったの？」

「知りませんでした」

おじさんの存在は知ってたけど、と心の中で付け加える。

「私は今まで3人くらい見たけどねえ。やたらと紳士気取りだったり酒飲みだったり、一口におっさんって言ってもいろいろなおっさんがいるんだから」

「はあ」

「で、そのうちの一人をしばらく飼ってたんだけど」
飼ってた、という表現も気になったが、その前に

「え、他の二人は!？」

「は? 追い出したに決まってるでしょ。あんな見知らぬおっさん」
先輩はサラダをつつきながら、常識でしょ? と付け加えた。私は
自分が思ってた以上に、常識を知らないらしい。

「だけどさー。結婚するとなったら、さすがに飼うのやめなきゃと
思つて。さすがに邪魔でしょ。新婚夫婦の生活にはさ」

私はしばらく茫然とした。先輩はその間にも美味しい美味しい
ながら、パスタを食べ進めている。おじさんを追い出すことにつ
いては、特に何も思っていないらしい。

「…あの、家から追い出すんですか。その、パプリカのおじさん」
先輩は、本当に知らないんだーと笑つてから続けた。

「そもそもあのおっさんたちを飼ってる人間の方が珍しいんだけど。
ほとんどの人は、自分が結婚するときには追い出すらしいよ。一人
暮らしの間はさ、留守番してくれたりして便利じゃん? だけどやっ
ぱ、結婚したらねえ」

「…追い出されたおじさんたちは、どうなるんですか?」

「え…。さあ? 野生化するんじゃないの? 追い出されたおっさんの
9割以上は猫とかカラスにやられて死んじゃうらしいけど」

その言葉を聞いて、私は顔が真っ青になるのを自覚した。おじさ
んが、死ぬ?

「先輩は…今一緒に住んでるおじさんを追い出すことについて、何
も思わないんですか?」

思わず攻めるような口調になってしまふ。だけど先輩は、相変わら
ず笑顔のままだ。

「別に何も。だって知らないおっさんだよ? それにおっさんたちだ
つて、いつかは追い出されるってことくらい知ってるよ」

「…。」

「パスタ冷めちゃうよ?」

私の頭の中は、パスタよりもおじさんのことであらうだった。

「久美ちゃんはずっと、いいお嫁さんになるよ」

そう言って、嬉しそうに笑ったおじさんのことを。

プロポーズ

登からその電話がかかって来たのは大学卒業間近、3月の初め頃だった。私はその時、家でおじさんとテレビを見ていた。

『ごめん。本当はこういうことは、ちゃんと会って言いたかったんだけど……』

登はすまなさそうな声でそう言った。

「なに？どうしたの？」

『…俺、来年の春から海外に行くことになった。アメリカ』

私の頭は一瞬だけ停止した。

『…そう』

彼は就職する前から、海外で働きたいと言っていた。その夢が叶ったんだ。だからここは「おめでとう」と言っべきだ。だけど、その言葉は出てこなかった。

『久美』

登は沈黙する私に、ゆっくりと言った。

『結婚してほしい』

「え、結婚!？」

思わず声に出してしまってから、しまったと思う。隣にいるおじさんは、口を「お」の字にして固まっている。おおお、と言いたいらしい。

『久美はもうすぐ大学を卒業するだろ？そしたら、俺と一緒にアメリカに行ってほしい』

私は黙りこんだ。しばらく続く沈黙に不安になったのか、登は『だめか？』と訊いてきた。

「…ちよつと、考えさせてほしい」

『分かった。だけどできるだけ早く返事してほしい』

「分かつてる」

『ごめん』

気まずい雰囲気のまま、電話を切った。

「久美ちゃん、結婚するのかい？登君と」

電話を切った私に、おじさんはいつもと変わらない笑顔で嬉しそうに訊いてきた。私はため息をつく。

「分かんない」

「どうして。登君のこと、嫌いになったか？それとも、アメリカに行くのが嫌？」

私は首を振った。登のことは好きだし、アメリカに行くのだって特に問題はない。英語には自信がないけど。

『ほとんどの人は、自分が結婚するときには追い出すらしいよ』

いつかの先輩の言葉が、頭をよぎる。おじさんは私の方を見ながら、笑顔で言った。

「何か悩んでることがあるなら、とことん悩めばいい。悩める時間は、少ないのかもしれないけど」

「…うん」

なんとか返事をした私に、おじさんは言った。

「おじさんのことは、気にしなくていいから」

いつも通りの、かわいらしい笑顔で。

その日の晩御飯はおじさんの希望で、ハンバーグになった。

「やっぱりおいしいよ、久美ちゃんのハンバーグ」

おじさんはいつもよりもたくさん食べた。あんまり食べると太っちゃうな」と笑いながら。

そしてその日の晩、おじさんはいなくなつた。

さよなら、おじさん。

おじさんがいなくなって3日が経った。3日間、私は近所を探しまわったけれど、おじさんは見つからなかった。

おじさんはきつと知ってたんだ。いつか追い出されるってこと。登にはまだ返事をしていなかった。おじさんがなくなったから結婚する！という気にもなれなかったからだ。

4日目、この日も一日中探したが、やはりおじさんは見つからなかった。すっかり日も暮れてしまい、私はとぼとぼとアパートへ戻る道を歩いていた。目の前を、猫が通り過ぎる。猫やカラスに……。それ以上は考えたくなかった。

「久美ちゃん」

聞きなれた声が聞こえたのは、アパートの近くにある電柱を通り過ぎた時だった。私はあわてて電柱の方を振り返る。

電柱の陰からひよこつと、おじさんが出てきた。初めて会った日に私が作ってあげた黄色いTシャツを着たおじさんは、上から下まで泥だらけだった。

「おじさん！」

思わず叫んだ私に、おじさんは「しーっ」と言っ、きよるきよるとあたりを見渡した。幸い、他に人はいなかった。

「おじさん、探してたんだよ？なんで何にも言わずに行っちゃった……」

泣きそうな私に、おじさんは申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんね。本当はもう、会わない方がいいと思っただけ」

おじさんは手に持っていたものを私に差し出した。

「これを渡したくって」

それは、一輪のタンポポだった。おじさんの着ているTシャツと

同じ色の、黄色いタンポポ。

「今までありがとう、久美ちゃん」

「おじさん…」

「おじさんは、久美ちゃんに幸せになってほしいんだよ。だから、お別れしようと思う」

娘を見守る父親みたいに、おじさんはほほ笑んだ。その顔は泥だらけだ。それを見た私は、ずっと前から考えていたことを言った。

「おじさん。おじさんも一緒にアメリカに行こうよ。向こうで、3人で暮らそう？登ならきつと、おじさんのことも理解してくれるよ」

「…ありがとう」

おじさんはそう言うってから、顔を曇らせた。

「だけど、行けない」

「なんで…？」

「…ラブラブのお2人さんに水を差すような真似はしたくないからね！はっはっは」

おじさんは明るい声で笑うと、もう一度「ありがとう」と言った。

「おじさんは、久美ちゃんに会えて本当によかった。このTシャツは、おじさんの宝物だよ。これを着るとね、冬でもとってもあったかいんだ」

メタボ体型だしね！と付け加えてから、おじさんはほほ笑んだ。

「おじさんのことは気にしなくていい。登君とアメリカに行つておいで」

「おじさん…」

「タンポポの花言葉はね、まごころの愛！」

おじさんは明るい声で叫んだあと、小さな声で付け加えた。

「それから、別離」

その声は震えていた。

「幸せになりなよ、久美ちゃん。おじさんはずっと応援してるからね」

私の足もとにタンポポをそつと置くと、こつちを見てにっこり笑

った。

「さよなら、久美ちゃん」

おじさんはそう言うと、アパートとは反対方向に向かって歩きだした。その背中が震えていた。おじさんが行ってしまおう。私の大切なおじさんが。

「おじさん、待って！！それじゃあ……」

アメリカ行きの飛行機の中で、私は読んでいた小説を閉じると丁寧にしおりをはさんだ。それを見ていた登が訊いてくる。

「そのしおりさ、すごく大切にしているよね」

「うん」

「自分で作ったの？タンポポの押し花」

「そうだよ」

私は眼を細めて笑った。

「大切な人からもらったタンポポなの」

……なんだこれ。アタシの頭は、急に働かなくなった。

結婚してアメリカに行ったアネキから、小包が送られてきた。小包に貼られた割れ物注意のシールを見て、アタシはてっきり要らなくなった食器でも送ってきたのかと思った。

特に迷うことなく、その小包を開けた。一人暮らしだし、そんなに食器は要らないんだけどなーとか思いながら。

だけど小包に入っていたのは、思ってた以上に小さな食器と服と、それから、

黄色いTシャツを着た、ちっさいおっさんだった。

おっさんはアタシの顔を見ると、とびきりの笑顔で言った。

「あ

やあ、じゃねえよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1393t/>

ピーマンおじさん

2011年5月16日18時40分発行